

潜伏疑問の認知言語学的研究

——指示参照ファイル理論による分析——

山 泉 実 田 中 太 一

大阪大学

東京農工大学

【要旨】本稿では、認知言語学における名詞句の意味に関する理論の1つである、指示参照ファイル理論を用いて潜伏疑問 (Concealed Questions) を原理的に分析する。CQとは「太郎はこの事故の原因を知っている」のように、CQ述語の項になる名詞句が間接疑問相当の意味を表す表現である。生成統語論や形式意味論のような意味論と語用論を画然と区別し、文法をあくまで形式的な体系と見なす立場からの分析には、A) 述語の意味的選択制限、B) CQとなる名詞句のクラス、C) 名詞句への修飾とCQ解釈の関係という3つの問題が残されている。本稿では、主体の心における (同一性の基盤となる) IDの変異様態をCQ述語によって述べる表現としてCQを捉え直すことで、A) IDの変異様態によって規定される7種の述語、B) フレーム・役割モデルによるカテゴリー化と結びつく名詞句、C) Bの名詞句としての解釈しやすさの上昇という解答を与える*。

キーワード: 認知言語学, 指示参照ファイル理論, 潜伏疑問, カテゴリー化

1. はじめに

潜伏疑問 (concealed questions) は、主に生成統語論 (西垣内 2020 等) や形式意味論 (最近のレビューは Frana 2020) で研究されてきた現象である。近年、日本において他の意味論の枠組みにおいても、注目を集めるようになってきている (西山 2013: 13 章, 山泉 2021 等)。しかし、認知言語学の視座からの本格的な研究は、管見の及ぶ限り、国内外を問わずまだ現れていない¹。本稿は、認知言語学における名詞句の意味論・語用論理論という側面を持った指示参照ファイル理論 (山泉 2020a, 2022, 2023a 等) の枠組みで潜伏疑問を分析し、潜伏疑問名詞句は何を表しているのか、どのような述語のどのような項が「疑問を潜伏させる」ことができるのか、

* 本論文の執筆にあたり有益なコメントをくださった窪田悠介, 西山佑司, 3名の匿名査読者各氏に感謝申し上げます。本研究はJSPS科研費JP22K00553, JP24K00060, JP25K04067の助成を受けた。

¹ 井元 (2006) は、西山 (2003) の変項名詞句の概念をメンタル・スペース理論の枠組みで換骨奪胎し、潜伏疑問名詞句を「役割解釈の一つであるが、名詞句が表しているコトガラ値相当のものとして働き」(p. 20), コトガラ (例「太郎がその時目撃した車は何かというコトガラ」p. 19) を指示する変項名詞句とみなす可能性を提示している。もしそうみなすことができるとしても、どのような場合にどのようなメカニズムによってそのようなことが可能になるのかが述べられていないため、本稿の検討対象とはしない。

潜伏疑問はどのレベルで捉えるべき現象か、それを可能にする認知能力はどのようなものか、といった根本的な問題に、認知言語学の視座から取り組む。

以下、2節では、潜伏疑問とは何かを理論中立的に導入する。3節では、本稿の分析の枠組みである指示参照ファイル理論を紹介する。4節では、認知言語学・指示参照ファイル理論の視座からは、潜伏疑問とはどのような現象として捉えられるかを議論する。5節は結論である。

形式意味論においては、研究の蓄積の結果、単純な潜伏疑問文の分析では各アプローチの優劣が現れず、非標準的で複雑な例の分析に研究の焦点がシフトしている (Frana 2020: 334)。本稿では、そのような細部には立ち入らず、認知言語学の立場から潜伏疑問研究の基礎を築く。

2. 研究対象：潜伏疑問文とは何か、何ではないか

発話中の名詞句²の最も典型的な用法は、言語表現による記述が当てはまる対象の指示とされるだろう。しかし、(1)の下線部名詞句は、そのように用いられているとは言い難い。

- (1) a. 太郎は、トルコの首都を知らない。
 b. 花子は、2022年FIFAワールドカップの優勝チームを予想できた。
 c. ケネディ大統領暗殺事件の犯人は未だ明らかではない。

これらが言語表現による記述の当てはまる対象を指示しているなら、(2) ab-iのように、対象の名前を代わりに使えるはずだが、そうすると文の意味が大きく変わってしまう。(2) cに至っては、対象が誰かさえわからない。一方、(1)の下線部名詞句を、指定疑問—対象の特徴・性質ではなく記述が当てはまるものがどれかを問う疑問(ただし、「どれ」や *which* の使用が暗示する、答えの候補が既に出揃っていることは前提とされていない) —の間接疑問節 ((2) abc-ii) で置き換えると、文の意味がほぼ保たれるという興味深い現象が見られる。

- (2) a. 太郎は、{i. # アンカラ / ii. トルコの首都はどこか³} を知らない。
 b. 花子は、{i. # アルゼンチン代表 / ii. …の優勝チームはどれか} を予想できた。
 c. {i. ?? / ii. ケネディ大統領暗殺事件の犯人は誰か} は未だ明らかではない。

本稿ではひとまず、(1)の下線部名詞句のように、指定の間接疑問節に何故か置

² 主要部を限定詞 (D) と考え、名詞句ではなく DP に疑問が潜伏していると考えられる立場もある。本稿では、どちらが主要部かという問題には立ち入らず、名詞句 (NP) と呼ぶ。

³ 「どこか」には曖昧性があり、本文で問題にしている指定疑問の読みだけでなく、地理的にどこにあるかを聞いているという読みもあるが、後者の読みは除外して議論する。

き換えられ、その疑問の答えを表す名詞句では何故か置き換えられない名詞句を潜伏疑問名詞句（以下、CQNP）と呼ぶ。もっとも、このパラフレーズの可否による規定は、扱う現象を当面確定させるためのものであり、後に現象の本質を見定めてからは、機械的にパラフレーズできないものでも、理論的规定に基づいてCQNPと認められるものが見出される（4.2.1）。以下、CQNPが表すとされる疑問を潜伏疑問、CQNPが含まれる文を（潜伏疑問と紛らわしい上に、研究者によって指すものが異なるものの）潜伏疑問文、CQNPを項に取る述語を潜伏疑問述語（CQ述語）と呼ぶ。

研究の蓄積の結果、潜伏疑問と似て非なるものの身分について、ある程度の合意が成立している。本稿でも、Nathan（2006: 1.2）に従って、「個体が埋め込まれた意味（Nathan 2006）」や「見知りの読み（Frana 2020: 2.2）」と言われるものを議論から除外する。例えば、(2) a-i と同じような意味の (1) a の読み—「まだ一度も訪れたことがないのだ」と続けるとその読みが喚起されやすい—では、「太郎はアンカラを知らない」を「太郎はアンカラがどんな街なのかを知らない」とパラフレーズすることができる。しかし、これは潜伏疑問の読みではない。そのような読みにおいて、問題の名詞句は、直感的に言えば記述の当てはまる対象を指示するだけであり、このことは、問題の読みが潜伏疑問でないことの証左となる。そして、それを含む発話の真理条件も異なる。前述の通り、CQNPは間接疑問節の中でも指定の間接疑問節に置き換えられるものに限られてきた（Frana 2020: 332）⁴。たとえば、(3) の a の文（Nathan 2006: 1.2.2.2 の例を改変）が潜伏疑問文とみなされるのは、b とほぼ同じ意味になる読みの場合であって、c とほぼ同じ意味になる場合の a の文は潜伏疑問文とはみなされない。(4) の a の文も、潜伏疑問文とはみなされない。これは通常 c の文とほぼ同じ意味になり、その場合 *French* は指定疑問 (b) に相当するわけではないからである。しかも、c とほぼ同じ意味の a では、d のような同じ対象の記述に置き換えられる点でも潜伏疑問文とは異なる（d 自体には潜伏疑問の読みが可能である）。これらの例も、何らかの点で潜伏疑問的な意味があることは間違いない。しかし、それを詳らかにするためには、まず、これらを除外した典型的な潜伏疑問文の本質を明らかにした上で、それに照らして共通点と相違点を検討する必要がある。

- (3) We discussed {a. Alex's wife/ b. who Alex's wife is/ c. how tall Alex's wife is}.
- (4) I taught Leslie {a. French/ b. what French is/c. how to speak French / d. the language spoken in Paris}.

⁴ 以下の例に潜伏しているのは、指定の疑問詞疑問ではなく、選択疑問や極性疑問である。

(i) 花子の司法試験の合否は不明だ。(ii) 花子はお腹の子の男女を知りたい。
これらについても、後述する RF の特質の値・関係性のリンク先の変異を問題にしているものとして分析可能であり、潜伏疑問文と認めることに問題はないが、議論を単純にするため、本稿では扱わない（山泉 2019, 2021a, 2023b 参照）。

3. 指示参照ファイル理論 (Reference File Theory, RFT)

本節では、山泉 (2020a, 2020b, 2022, 2023a 等) による一連の研究を参照し、指示参照ファイル理論 (Reference File Theory) について、潜伏疑問に特に関係する点を中心に概観する⁵。まず重要なのは、この理論の中核となる指示参照ファイル (Reference File) という道具立ては、言語に特化したものではないという点である。端的に言えば、その役割は (心的に構築された) 世界にモノをもたらすことである。

認知言語学では一般に、それぞれの主体が経験する世界は、当の主体が有する様々な認知能力によって構成されたものであり、いわゆる「外界」そのものではないと想定されている (cf. Langacker 2015: 2.5)。RFT は主体にとっての世界の経験を、分析者の観点から捉える理論であり、それぞれの RF は (分析対象となる主体にとっての) 対象そのものだと規定している (山泉 2020b: 31)。たとえば、あるヒトが〈机の上に本がある〉という事態を経験する場合、つまりそのような心的対象を構成する場合には、その本という RF が心的に構築されていることになる。その RF にはたとえば、机の上という位置、タイトル、表紙の色、分厚さなど、対象に関する様々な知識が含まれている (これはつまり、当の主体がその本について様々な知識を有しているということである)。このとき、本からカバーを外し、横に並べて置きましょう。すると、そこには1冊の本と1つのカバーという2つの対象が存在するという経験が得られるようになる。RFT の観点からはこのことは、本 RF とカバー RF の2つのファイルが構築されるというように捉えられる。

RF はさらに、知覚されていない対象を想起する際にも構築される。たとえば、小学校の同級生である太郎について考える際、目の前に実物の太郎が存在するわけではない⁶。それにもかかわらず、その思考は太郎についての思考であり、その意味で主体は太郎に関する心的経験をj得ている。このことが可能なのは、当の主体にとっての直接経験をj超えて太郎 RF を構築する能力があるためである。

RFT では、このように RF を構築する認知能力を、名詞句を解釈する際にも用いていると考えている⁷。任意の名詞句は1つの RF (またはその部分) に対応する⁸。

⁵ 指示参照ファイルという道具立ては、mental file (Recanati 2016) とは、様々な点で大きく異なる点に注意されたい。RFT は、メンタル・スペース理論と同様、外界と概念世界の対応関係は扱わず、外界の対象や ER 関係を主題化していない。RFT の源流となったジャッケンドフ (2012/2019) においても、Mental Files 理論への参照は為されておらず、理論的継承関係は存在しないものと思われる。理論間関係については別稿を期したい。

⁶ 認知言語学の想定によれば、〈目の前に実物の太郎が存在する〉という事態もまた、外界そのもののあり方ではなく、いわゆる外界のあり方として心的に構築された心的世界のあり方であることになる。外界については、心的世界と一定の相関が見込まれている (Langacker 2008: 14.2.1) もの、(経験の全てが心的世界に含まれてしまう以上は) 究極的にはアクセスしようがないものである。

⁷ これはつまり、名詞句の意味は (話し手が想定する) 聞き手にとっての対象およびそのあり方だということである。このような立場の妥当性についてはジャッケンドフ (2012/2019) を参照されたい。

⁸ この点は「名詞はモノをプロファイルする類である」(Langacker 2008: 539) という認知文法

ただし、「対応」と言っても、名詞句の意味論の意味が定まれば対応する RF も定まるといふようなものではない。このことは、ヒトのコミュニケーションは、意味が固定された記号のやりとりというコードモデル的なものではなく、話し手・聞き手が互いの知識状態や意図を読みあうことによって成立する、意図明示・推論コミュニケーション (ostensive-inferential communication) であるとする RFT の機能主義的言語観からの帰結である。RF は言語表現のいわゆる意味論の意味ではなく、会話参加者が百科事典的知識などの様々な情報を用いて構築する心的対象であり、同一の言語表現を手がかりとして喚起されたとしても、必ずしも同一内容の RF にはならないという点に注意されたい。

以下では、RF のデータ構造について順を追って説明する。それぞれの RF は「位置付け (@)」に相対的に、「ID」・「存在論的範疇 (ONT)」・「内容特徴 (CNT) (の束)」に関する情報をそれぞれ1つずつ含んでいる⁹。

位置付けは、RF (および後述する内容特徴) が、どの心におけるどの世界 (の、どの様相) に位置づけられる心的対象なのかを示すものである。RFT では、発話の主な機能は聞き手の心的状態の操作だと考えている¹⁰。これを反映して、名詞句に対応する RF は通常、(話し手の想定する) 聞き手の心に位置づけられるものとなる。話し手は発話によって、聞き手の視座から開ける心的世界における対象を操作することを試みるのであり、名詞句の意味を考える際には、それがどの主体にとっての心的対象 (RF) と結びつくかが決定的に重要だということである。本稿の主題である CQ においては、聞き手以外の心が考慮の対象となることが多いが、あくまで (話し手が想定する) 聞き手が想定する他者にとっての心的対象である点に注意されたい。

ID の主な機能は、RF を構築する主体にとっての、対象の心的同一性を保証することである。RF は対象に関する知識のすべてを含んでいるわけではなく、その時々目的や関心に依拠して心的に構築される心的対象である。そのため、異なる機会に構成された RF が同一の対象であること (分析者の視点から言えば、RF を構築する主体にとって、RF が同一の対象として経験されていること) を個別に保証する手立てが必要である (これはつまり、主体の視座から経験される〈外界における対象の数的同一性〉は、RF そのものの数的同一性ではなく、ID の質的同一性によって支えられているということである)。また、同一性は RF が位置づけられる心に

の主張と同趣旨だと考えられる。

⁹ このことは、形式的には次のように整理できる：RF = [“@1” : 〈“ID” : ID1, “ONT” : ONT1, “CNT” : {CNT1_1, CNT1_2, ...}〉, “@2” : 〈“ID” : ID2, “ONT” : ONT2, “CNT” : {CNT2_1, CNT2_2, ...}〉, ...]。この表記は査読者のコメントを参考にしたものである。

¹⁰ これは、意図明示・推論コミュニケーション (スベルベル・ウィルソン 1995/1999) の獲得なしには、言語のような複雑な記号体系は成立しないという考え (スコット = フィリップス 2015/2021) に基づく想定である。また、ここでの「操作」には既知の事柄に関するリマインドなども含まれる。すなわち、必ずしも信念状態が変更される必要はなく、意識に登る事柄を調整するという程度の操作であっても良いということである。

において同定されている(つまり、どの対象か具体的に定まっている)場合だけでなく、同定されていない(つまり、どの対象か具体的に定まっていない)場合にも見出されるものである¹¹。たとえば、聞き手が事件 A の犯人と事件 B の犯人のいずれも誰であるか知らない(同定されていない)場合であっても、それぞれの「事件の犯人」RF は明確に区別され、情報が管理されている。「事件 A の犯人は実は事件 B の犯人だった」という発話が有意味なのはそのためである。

ID には同定されている RF が持つ定項(a, b, …), 未同定の RF が持つ自由変項(x, y, …), 叙述名詞句によって構築された RF が持つ束縛変項(α , β , …), (何らかの位置づけにおいて)存在しないと見なされた RF が持つ null 値(ϕ , ψ , …)がある^{12,13}。また、以下では種類を問わない任意の値として ID (および、後述する値・リンク先)に言及する際に「□」という記号を用いる。

存在論的範疇は、人・出来事・数^{かず}など RF の種別(cf. 横路 2021)を表す。タイプとトークンの区別が必要な場合には[± token]を用いて表記する。存在論的範疇は対象を対象として切り出す際に必須の要素であり、個性性の基盤となっている。

内容特徴(CNT)には、記述・[特質: 値]・《関係性: リンク先》が含まれる。記述とは〈a がアメリカ人である〉〈x が花子 b を殺した〉など、当の RF の ID を含む命題的内容である。本稿の主題である CQ の分析にとって重要なのは、[特質: 値]・《関係性: リンク先》である。前者は典型的には[身長: 2m]のように、独立の RF に対応しない「度合い」を表す¹⁴。《関係性: リンク先》は、RF 間に成立する関係を表す。たとえば、太郎が次郎の父親である(ことが使用事象において焦点化されている)場合には、次郎 RF の CNT に《父親: 太郎》が含まれることになる。[特質: 値]と《関係性: リンク先》はどちらも、〈a は身長 2m だ〉・〈b の

¹¹ 同定はあくまで RF が位置づけられる主体の心において生じる過程であることに注意されたい。たとえば、「太郎は花子が誰か分かっていない。」という発話においては、通常、話し手・聞き手はどの人が花子なのか理解している、すなわち、花子を同定していることになる。そのため、話し手・聞き手は「誰が花子なのだろう」という、同定を目的とした思考を持つことができない。そのような思考は、花子を未同定である太郎に帰されるものである。

¹² ID は位置づけに相対的であり、ある位置づけにおいて ID null 値であるとしても、別の位置づけにおいて定項や変項の ID を持つのであれば、その RF は概念化主体の心に位置づけられる。たとえば、「サンタクロースは存在しない。」という発話の典型的な解釈は、聞き手にとっての現実に存在するとされていたサンタクロースなる対象は、実際の現実には存在しないという程度のものである。この発話を受けた聞き手は、それまで(自身にとっての)現実において ID 定項ないし変項の RF として捉えていたサンタクロースの ID を null 値とし、自身の想像する世界という位置づけにおいて ID 定項ないし変項にするという心的操作を行うことになるだろう。

¹³ RFT における定項・自由変項は、心の働きを捉えるための道具立てであり、いわゆる論理定項などとはまったく異なる点に注意されたい。ID が定項か自由変項かは、あくまで(典型的には、話し手の想定する聞き手である) RF が位置づけられる心の状態によって決まる事柄である。たとえば、誰が太郎であるか知らない聞き手に対して「太郎はあの人だ」と発話する場合には、まず ID 自由変項(x)の太郎 RF が聞き手の心において喚起されることになる。

¹⁴ 度合いが独立の RF とならないのは、ヒトが 2m, 3kg などをモノ(Langacker 2008)として表象することがない(か、極めてまれである)からである。

父親は太郎だ」などと記述によっても表現できる。両者の違いは概念内容そのものではない。ある内容が値やリンク先として表象されるのは、発話において主な認知効果を担っている場合だと考えられる (4.1.1 参照)。

以上が RF のデータ構造である。ここからは、本稿の主題である潜伏疑問と深く関係する、指定文の例を取り上げ、RF という道具立てを用いて、具体的な発話がどのように記述・分析されるかを示す¹⁵。(5) a は「あの事件の犯人は誰かと言えば太郎だ」という程度の意味を表す指定文である。ここでは、聞き手が太郎のことを知っているが、太郎が犯人であることは知らなかった場合を想定している。

- (5) a. 太郎があこの事件の犯人だ。
 b. 太郎 RF : @聞き手 / ONT 人 / ID a / CNT <a が男性だ> など
 c. 犯人 RF : @聞き手 / ONT 人 / ID x / CNT <x があの事件の犯人だ>
 d. 太郎(犯人)RF : @聞き手 / ONT 人 / ID a / CNT <a があの事件の犯人だ>

2つの名詞句「太郎」と「あの事件の犯人」は、それぞれ (5) b, c の RF と対応する。聞き手が太郎については既知であるため、聞き手の心における太郎 RF の ID は定項 (a) である。それに対し、事件の犯人については未知であるため、(この発話を耳にする以前は) 聞き手の心における犯人 RF の ID は自由変項 (x) である。次節で詳述するように、ヒトには自由変項の値を定めようとする性向がある。話し手がその性向に沿うかたちで有用な情報を伝達しようとしているものと聞き手が推測した結果、犯人 RF の ID x が太郎 RF の ID a によって置き換えられる (すなわち、指定される) ことによって両ファイルは統合される。その際には名詞句の意味論的意味が大きき手がかりとして参照されているものの、決め手になるのは、あくまで聞き手の (話し手の意図を踏まえた) 推論である。このようにして (5) d の RF が生じる¹⁶。このとき聞き手は「あの事件の犯人を知っている」人であることになる。結論を先取りして言えば、以下で論じる潜伏疑問文とは、指定文において生じるような知識状態の変化 (やその結果など) を述語で明示的に語る文として特徴づけられるものである。

4. 認知言語学的視座からの潜伏疑問の分析

以下では RFT の枠組みで潜伏疑問を分析していく。まず、概念的な問題を議論する (4.1)。それを元に記述的問題に解答を試みる (4.2)。その上で、潜伏疑問を形成する名詞句を、カテゴリー化の2つのモデル (氏家・田中 2024) の観点から特徴づける (4.3)。本節を通して、Harris (2007: 2.1.1) が挙げる CQ の記述的性質

¹⁵ 次節以降では、RF のデータ構造の内、議論に関与的でない部分は省略して表記する。

¹⁶ このような分析には、聞き手が指定文によって理解する内容は、ID 自由変項の RF についてのもの (e.g. 犯人は太郎であること) だけでなく、ID 定項の RF についてのもの (e.g. 太郎は犯人だという属性を有すること) でもあり、知識においては両者が同時に生じるという点を適切に捉えられるという利点がある。

の中核を成す5つの特徴I～V（都度紹介していく）の認知言語学的扱いにも触れる。さらにFrana（2020: 344）に挙げられている3つの未解決問題（VI～VIII）にも認知言語学の立場から回答する。これによって、本稿のアプローチが形式意味論の潜伏疑問研究に比肩しうるものであることを示す。

4.1. 潜伏疑問全般に関する概念的問題

CQ述語は意味論的には指定の疑問詞疑問節相当のものを項として取るはずだが、それが表される統語的項の位置に適切な名詞句だけを置くと、多くの言語で潜伏疑問の解釈が成立する。これは何故か。本節では、このような潜伏疑問についての根本的な問題に取り組み、それに答えを与えるにあたって、RFTが適していることを示す。

4.1.1. RFT から見た潜伏疑問：心における ID 等の変異の描写

CQNP が指定の疑問詞疑問節でパラフレーズできる（性質I）のは何故か。この問いに答えるにあたって、そもそもCQNPは何を表しているのかが中心的な問題となり、認知言語学以外の研究で様々な答えが提出されてきた。西山（2013: 13章）では、CQNPは命題関数（変項を埋めると命題が出力される関数）を表すとされる。また、形式意味論においては、CQNPのデノテーションが何かについて、命題の集合、可能世界の集合、個体概念など様々な説がある（Nathan 2006, Frana 2020）。もっとも、これらの答えは、潜伏疑問の意味の形成のされ方についてのものであり、なぜCQ述語の項となる名詞句が指定疑問詞疑問節相当の意味を表すようになるのかという根本的問題に答えるものではない。

RFTを採用する本稿では、CQNPもRF（またはその一部、具体的には特質（-値）または関係性（-リンク先））がその意味であり、それを含む発話によって聞き手の心の特定の操作が意図されていると考える。前述のように、RFは常に、それが存在する心の視座に相対化して理解する必要がある、名詞句に対応するRFは常に埋め込まれた心（話し手の想定する聞き手の心）にある。潜伏疑問ではさらに埋め込みが深くなっている。潜伏疑問文では、談話において問題となっている（太郎などの）心があり、その心の状態に関して聞き手の心の操作が意図されている。潜伏疑問文の最も重要かつ定義的な特徴は以下である：談話において問題の心にあるRFのID等の値がどう変異するかがCQ述語によって記述されている。（以下「ID等」には、特質と関係性も含み、「ID等の値」には、特質の値と関係性のリンク先も含む。定まっているものをいずれについても定項と呼ぶ。）問題の心の持ち主（位置付け@の値の一番右に記される）は、言語的に明示されない話し手や聞き手であることも、述語「知る」や「忘れた」の主語として明示される場合も、「明らかだ」の二でマークされる対象のように文法的に必須ではないこともある。そしてCQ述語は、変異する値を含むRFがある心の状態を、値がどのように変異しているのかを含めて描写する（それに対して、非CQ述語の多くは項のRFの内容特徴を表し、

ID等の値が変わることはない)。潜伏疑問文の発話で意図されているのは、そのような状態に聞き手の心を変えることである。

畢竟、潜伏疑問とは、心にあるRFのID等の変異の問題である。次例を用いて敷衍する。

- (6) 太郎は {a. 事件の犯人 / b. 自分の身長 / c. ポチの父親} を {i. 知らない / ii. 知った / iii. 忘れた / iv. 思い出した}。
- (7) a. 「事件の犯人」 / @太郎 / ONT 人 / ID □ / CNT □ が洋梨を盗んだ¹⁷
 b. 「自分の身長」 / @太郎 / ONT 人 / CNT [身長 : □]
 c. 「ポチの父親」 / @太郎 / ONT 生物 / CNT b 《父親 : □》 (b はポチ RF の ID¹⁸)
- (8) □ の変異 a. 「知らない」 $x \text{ or } a \rightarrow x$ b. 「知った」 $x \rightarrow a$
 c. 「忘れた」 $a \rightarrow x$ d. 「思い出した」 $(a \rightarrow) x \rightarrow a$

(6) で述語が問題とする心は (話し手が想定する聞き手の心にある) 太郎の心である (「@ (話し手 > 聞き手 >) 太郎」と表記し、適宜 () 部分を省略。この種の埋め込みは、原理的には無限に可能である)。(6) a・b・c では、それぞれ (7) a・b・c で表示した (話し手が想定する聞き手の心にある太郎の心にある) RF が問題になっている。(6) a の場合、CQ 述語が問題としている変異は ID の値であり、「知らない」ではその ID が x であるか a であるかという変異が問題となっていて、それについて、自由変項 (以下 x) だと述語で述べている。当然だが、これらの文では、話し手・聞き手自身が犯人などを知っているかどうか (すなわち、犯人 RF @話し手や犯人 RF @聞き手の ID 等が a か x か) は全く述べられていない。ii 「知った」では x が定項 (以下 a) になったこと、iii 「忘れた」では a が x になったこと、iv 「思い出した」では、 a から x になっていたものが a に戻ったことが述語で述べられている。「述べる」ということを敷衍すると、太郎の心の状態の変異に関して聞き手の心を操作するべく、話し手は潜伏疑問文を発しているということである (文が「太郎は～」ではなく「あなたは～」であれば、聞き手の心の状態の変異に関する聞き手の心の操作が意図されている)。つまり、CQ 述語は、主語の指示対象となる主体の心を直接記述しているのではなく、当該の心についての話し手の見積もりを記述するのである。(6) b の「身長」の場合には、太郎 RF の内容特徴の特質 [身長 : □]

¹⁷「犯人」という語が問題なく理解される場合、話題になっている事件が話し手・聞き手で共有されている必要がある (氏家・田中 2024)。ここでは、それを洋梨盗難事件としておく。それが話し手と聞き手の心の「犯人」RFにおいて、CNTに埋め込まれている。

¹⁸本稿では、定項に a, b, \dots とアルファベットの始めの方を用いる。任意の定項の意味で便宜的に a を用いることもある。もちろん実際には我々は非常に多くの定項 ID を持っており、それらは区別されているので、常に a, b, \dots という同じ定項を用いているわけではない。論述で用いるアルファベットは適宜リセットし、 a から割り振り直す。なお、ID は長期記憶のアドレスによって区別されており、ワーキングメモリの RF の ID には、そのアドレスへのポイントが含まれていると考えられる。

の値に対して同様の変異が、(6) cの「ポチの父親」ではポチ RFの内容特徴の関係性《父親：□》のリンク先（およびポチの父親 RFの ID）に対して同様の変異が述べられている¹⁹。

一方、(5) aのような指定文は（典型的には聞き手の心にある）RFの ID等の自由変項を定めるものであり、その結果、RFの統合が起こる。聞き手の心に起こったその指定は潜伏疑問文—「花子は次郎に事件の犯人を教えた」等—では次郎の心に起こったこととして描写の対象となる事柄である。両者はレベルが異なり、潜伏疑問文では統合は起こらないという相違点が存在するのである。

そもそもなぜID等の変異が言語使用者の問題になるのかということ、ヒトには、心、特にワーキングメモリ中のRFにある自由変項を定めることによって認知効果を得たい、つまり知識を改善したいという性向があるからである。「言語学者3000人が選んだ最も偉大な言語学者」と聞いたら、誰なのか知りたくなるものだ。「3分で診断！あなたの人間としての価値は_____円です！」と言われたら、空欄の値を知りたくなるだろうし、親が再婚すると言ってきたら、結婚相手が誰か知りたくなるだろう。読者が埋めたくなくなったこれらの自由変項は、読者自身の心のRFにある。なお、聞き手が知らないことを言えば何であれ必ず聞き手の心のRFの変項を定めたことになるわけではない。RFもその中の自由変項もワーキングメモリにある状態で、その部分についての情報を得なければ、自由変項を定めたことにはならないからである（cf. Declerck 1988: 19, inter alia）。

上の例では、あなたの心のRF、例えば最も偉大な言語学者RFができ、そのIDはラネカー（に対応するRFのID）だろうかそれとも……というような変異があったかもしれない。動的である心にあるRFは、このような変異を含むことがよくある。CQ述語は、ID等がどう変異するかを描写するものである。どう変異するかを表すCQ述語を伴わない上のNP「言語学者3000人が選んだ最も偉大な言語学者」は、CQNPとは言えない。なお、自分の心にあるRFのID等の変異に関心を持つのは当然だが、(6)の太郎のような他者の心にあるRFのID等の変異も、多くの場合、社会に生きる我々にとって語るに値し、潜伏疑問文で語られる。たとえば、自分の年取がいくらであるか（自分RFの特質-年取の値）を誰がどの程度の詳しさと知っているかをあなたは大体把握しているし、把握しておきたいと思うだろう。それを記述すると、「太郎は私の年取を知っている」のような潜伏疑問文になる。以上が本節冒頭の根本的問題に対するRFTの答えとなる。

4.1.2. 「潜伏疑問の答えとしては個体だけが認められる」（性質V）

以上の潜伏疑問の根本的理解に基づいて、次例（Harris 2007: 16より引用）が示

¹⁹ 特質-値の場合には見知りの読みがとともありそうにない（Cf. Frana 2017: 19）。特質-値はRFの部分構造にすぎず、独立した見知れる対象ではないからである。注14も参照。

す性質 V「疑問の答えとしては個体だけが認められる」²⁰を記述的に一般化できる。潜伏疑問の (9) a は、犯人である個人を特定したという c-i の解釈が可能である一方、特定に至っていない c-ii の解釈はできない。一方、CQNP を間接疑問節でパラフレーズした b は、c-ii の解釈も可能である。たとえば、犯人がジョンである場合、a はジョンが犯人だとわかったという解釈は可能だが、犯人はスミスの元交際相手だと（それが誰かは知らないが）わかったという解釈とは整合的ではない。一方で、b はどちらの解釈とも整合的であるとされている。

- (9) a. Officer Hopkins found out the murderer of Smith. \equiv c-i, \neq c-ii
 b. Officer Hopkins found out who the murderer of Smith was. \equiv c-i or c-ii
 c. Officer Hopkins resolved the question of who murdered Smith, {i. by identifying the individual/ ii. by finding out some essential fact about individual denoted by *the murderer of Smith*}.

なお、この場合の個人を特定するという事は、単純に名前を知ることと同じではない。西垣内(2020: 65-66)は、家に名前が付いている場合の「…家^{いえ}がわかった」は潜伏疑問として理解できる一方、名前がない場合、「疑似潜伏疑問」を含む文としての解釈が普通だとしているが、本稿では名前の有無による区別は行わない。RF の ID を定める、すなわち対象を同定するのは、対象の名前を知ってそれに結びついた対象を同定する方法に限らないのである。上で述べたように、CQ において変異が問題になるのは、RF の ID 等の値であり、対象の名前ではない。

上述の制限は、CQ に特有の性質で、間接疑問節の場合にはあてはまらない。(9) a では、“the murderer of Smith” が RF 全体に対応する NP であり、その ID の値が x から a になる解釈 c-i は可能でも、新たな内容特徴がそれに加わるという解釈 c-ii は、間接疑問節の b とは対照的に不可能である。また、次の例の b が潜伏疑問文にならず、a のような意味にならないのは、授業の開始時刻は—それが変わっても別の授業になるわけではなく、同じ授業の開始時刻を変更することが可能であるため—授業 RF の ID ではなく内容特徴に入る情報だからである。

- (10) a. Alex wants to be on time, so I told him when the class he should attend is.
 b. # Alex wants to be on time, so I told him the class he should attend.

(Nathan 2006: 22)

以上の分析は、RF のデータ構造の記述力を示している。また、そもそも CQNP がなぜ指定の疑問詞疑問節と同じような意味になるかといえば、指定文で定まるところと、CQNP で変異が描写されるところが RF のデータ構造の点で同じ箇所当たるからである。

RF の自由変項を定める際には、必ずしも正しい値を「過不足なく指定」(西垣内

²⁰ この「個体」は少なくとも本稿の用語法では特質の値を含まないという点で問題がある。

2020) できなくとも、十分な認知効果を得られる。たとえば、ある金庫の中の物を盗んだ容疑者をリストアップする際には、金庫を開けられる人を過不足なく知る必要がある。しかし、金庫の中の物を取り出したいときには、開けられる人全員を知る必要はなく、1人で充分である。西垣内(2020)は、潜伏疑問文ではCQNPに「含まれる変項の値を与える潜在的な「答え」が変項の値を過不足なく埋める」(p.39)という成立条件が課されると主張するが、潜伏疑問文「花子はこの金庫を開けられる人を知っている(から中の物を取り出せる)」は、花子は金庫を開けられる人全員知っているという解釈でなくとも潜伏疑問文として問題ない。全員知っていなければ真にならないかどうかは、コンテキスト次第である。

CQにおける変異がRFのデータ構造の中でもID・特質・関係性の値に限られるのはなぜか。これは、簡単ではないが、検討する価値のある理論的問いである。RFの位置付け(@)は背景的情報であり、存在論的範疇(ONT)の値が何であるかは形而上学的議論以外では議論されることはないため、これらはCQの変異の焦点にはならないと考えられる²¹。元来対象を心の中でトラッキングする道具立てであるRFにおいて、その同一性を担保するIDが注目され、その変異が問題となり得るのは自然なことだろう(cf.山泉2022: 5.2)。RFが言語と接続してCQNPに対応して用いられる場合でも、この点は変わらないのだと理解できる。特質-値、関係性-リンク先の値等でない方は、値・リンク先の領域^{ドメイン}であり、基本的に変異するようなものではない。確かに、「アンタ、あの娘の何なのさ」(ダウン・タウン・ブギウギ・バンド「港のヨーコ・ヨコハマ・ヨコスカ」)のように関係性が問われることはあるが、そもそも値/リンク先の表現で特質/関係性を表せないため、CQNPになることはない。

残るは、記述が変異の焦点にならない理由であるが、これについては、どのような内容特徴が特質の値や関係性のリンク先ではなく記述とされるかという問題を先に片付ける必要がある。そのヒントとなるのが、Declerck(1988)による指定文と措定文の違いである。「太郎は犯人だ」(措定文)と「太郎が犯人だ」(指定文)が示すように、両者は真理条件的には等価でも、多くの点で異なる。ここで重要なのは、同じ情報が措定文の場合には記述として、指定文の場合には特質-値または関係性-リンク先としてRFに入り得ると、以下の理由から考えられることである。Declerckによると、指定文は、[Wh]疑問と答えのペアと全く同じ前提を有し、発話時に聞き手の意識—RFのあるワーキングメモリと読み替えてよかろう—に(値を埋められることになる)変項が要求される(pp.6, 9, 19)。一方、措定文は、Wh疑問の答えにも使えるとはいえ、それ自体では「全く質問に答えているように感じられない」(p.55)。つまり、そのような埋められるべき変項は必要とされないとい

²¹「あの物体の正体がわかった」(査読コメントによる)という例では、問題のRFのONTの値は物(この場合、物体としての人を含む)であることは確定しており、その存在論的範疇の中での(内容特徴で表される)変異が問題となっている。

うことだろう。この違いに注目すると、措定文においては、述語名詞句からの情報が単なる記述として主語 RF に入るのに対して、指定文（例 (5) a）が用いられるのは、値等（この場合は犯人 RF の ID）の変異に関心が向けられている場合で、述語名詞句の情報（太郎 RF の ID）は、記述ではなく特質 - 値・関係性 - リンク先として RF に入ると理論化することができよう。こうして、特質の値や関係性のリンク先とは対照的に、記述の部分が CQNP の変異の焦点にはならないということが理解でき、このことは、変異を描写する潜伏疑問文でも同様であると考えられる。

4.1.3. CQNP に果たして疑問は潜伏しているか

以上の基本的な潜伏疑問の特徴付けを元に、Harris (2007: 2.1.1.1) が提起した「CQNP が疑問節のパラフレーズに対応することは、両者の何らかの意味的類縁関係を明らかにするのか、するとしたら類縁性はどの程度か」（問題 I'）を論じる。潜伏疑問の初期の代表的研究である Baker (1968: 6 章) は、間接疑問節からの統語的変形により、CQNP を導いた。しかし、この立場は今日では支持されていない (Frana2020: 331)。一方、CQNP は疑問文とデノテーションが同じだと考えるアプローチでは、意味的にのみ疑問が潜伏することになる。この立場は形式意味論において有力で、西垣内 (2020: 49) — 「Frana (2017) によって支持されている「潜伏疑問」は意味的に (のみ) 疑問節であって、統語的には名詞句 (DP) であるという考え方には説得力があり」と述べている—もこの立場に立つと言える²²。この立場では、疑問を直接表す間接疑問節と CQNP の間に内的な繋がりが想定されている。しかし、Harris (2007: 12f.) がこの問題に対する可能なアプローチを列挙する中で指摘しているように、両者の意味関係には様々な可能性があり、CQNP の意味を疑問文／節に還元して考える必要はない。我々は、CQNP の意味は直接疑問文にも間接疑問節にも還元されるべきではないと主張する。これは、潜伏疑問文では談話において問題の心にある RF の ID 等の値がどう変異するかが CQ 述語によって述べられているという前節の主張からの帰結である。そもそも CQNP を疑問文／節に還元・換言することに全く問題がないなら、前節のような議論は不要だった。前節で示したように、CQNP は言語化された疑問文／節では表せないものを表している。従来なかった新しい捉え方のためにとっつきにくいものの、RFT なら何を表しているかが把握できるのである。

上述の RF 中の自由変項を定めなくなる認知的性向と、日常の意味での「疑問」一己の心の自由変項をコミュニケーションによって他者に差し向けて定めてもらおうとする働きかけ—は概念的に区別できる。ヒトにこの性向があるからこそ、直接疑問文による疑問の働きかけができるのであり、逆ではありえない。そして、潜伏

²² 西垣内 (2020) の記述に反し、Frana (2017) が擁護する説は、CQNP が個体概念 (individual concept) を表すとする IC-アプローチである (p.8)。これは、CQNP の意味を疑問や命題 (の集合) のような命題的対象にシフトさせる命題的アプローチとは別系統とされている (pp.4-5)。

疑問文に潜伏しているとされる「疑問」とは、疑問の働きかけではなく、自由変項を定めなくなる認知的性向と強く結びついたものである。つまり、潜伏疑問文に直接疑問文が表す類の「疑問」は潜伏していないということである。したがって、本稿は、西垣内 (2020: 38) の、変項 x の値を指定する「指定文」に対比して「変項 x の値を問うのが「潜伏疑問」という特徴付けと見解を異にする。「変項の値を問う」という特徴付けは、「問う」の意味もその主体も不明確であるだけでなく、CQ 述語の意味の多様性 (4.2.1) がカバーできないという問題もある。また、上述の指定文とのレベルの違いも捉えられていない。

CQNP の意味は、間接疑問節の意味にも還元できない。潜伏疑問と疑問文を切り離すことは直観に反するかもしれない。しかし、両者が分かち難く思われるのは、第一に変異が問題になる ID 等が関わる言語表現は、言語表現として基本的な主文 (root sentence) の形では疑問文となるのが普通であることと、CQNP を考察する際の最大の手がかりが、疑問文を埋め込んだ間接疑問節によるパラフレーズであるという事情によるものにすぎない。CQNP が間接疑問節にパラフレーズ可能であるとしても、両者の意味が等しいことは保証されないのである。

間接疑問節の RFT による詳しい分析を提示する用意はないが、両者の意味の異同を記述するのに必要な範囲で述べておく。主節述語の項として働く間接疑問節で、CQNP を置き換え可能なもの (例 洋梨を盗んだ犯人 (→誰が洋梨を盗んだか) がわかった) は、統語的に NP かどうかはともかく、述語の項である以上、概念構造におけるその対応物は、RF のようなデータ構造を持つと考えられる。そして、その ONT の値は、節で表される以上、何らかのト的なものである。そして、その RF の CNT には、変異が問題になる部分 (疑問詞が対応する) があり、そこは、節の残りの部分の表すフレーム事例における何らかの役割 (この場合は、洋梨を盗んだ者) としてカテゴリー化 (4.3) されている (この役割を決める際には、疑問詞の種類によって表される存在論的範疇 (例「誰」は ONT 人 / ID x) も参照される)。間接疑問節を項にとる述語は、節全体が表すコトの心的表象において疑問詞に対応する部分がどのように変異するかを表し得る。しかし、間接疑問節は CQNP と対照的に変異を問題にするとは限らない。このため、従来指摘はなかったようだが、間接疑問節 ((11) a) は、「議論する」「記述する」のような述語—ID 等の変異をプロファイルせず潜伏疑問名詞句 (b) とは相性が悪い—の項にもなれる²³。これらは、変項を含んだ事柄が動作の対象で、その扱いの様態をプロファイルすると考えられる。

²³「考える」には微妙な多義があり、以下の意味の「考える」はここでは除外する。変異を背景として定項を挙げる (i) の「考える」の用法は潜伏疑問文ではない。(ii) のような、全く無かったものを新たに考案する「考える」は、潜伏疑問述語だが、ここで問題にしている意味の「考える」ではない ((18) の d タイプ)。

(i) 今度の旅行先は箱根を考えている。(ii) 書き始めた論文のタイトルを考える。

- (11) a. 誰が事件の犯人か／次期大統領が誰か を議論する／を記述する／
 に興味がある・ない／が話題だ／を気にする。
 Cf. b. ??事件の犯人を議論する／を記述する／に興味がある・ない／が話題だ
 ／を気にする。(潜伏疑問の読みでない場合は容認度が高まる)

項が間接疑問節ではなく CQNP の場合、(コトを字義的に表す名詞「問題」などが主要部でなければ) そのような自由変項を含んだコト RF には対応しない。この点は、間接疑問節が項の場合と対照的である。CQNP は変異が問題になっている値を含む RF (またはその部分構造としての特質 - 値・関係性 - リンク先) に対応し、例えば「犯人」なら対応する RF の ONT は人であり命題や疑問のようなコト的存在者ではない。両者の間の存在論的範疇の差は、以下の例(間接疑問節にパラフレーズできないため、通常は潜伏疑問文とはみなされず、我々も上述のレベルの違いのためにみなさない)の容認性の違いにも現れる。間接疑問節の a が容認されないのは、主語の節は ONT がコトであり、述語「太郎」(ONT 人) や ONT 人の RF を項にとる「いる」とミスマッチを起こしているからである。一方、b は主語名詞句「犯人」の RF が ONT 人で、そのような問題はない。

- (12) a. *誰が事件の犯人かはいない。 b. 事件の犯人はいない。
 (13) a. ??誰が事件の犯人かは太郎だ。 b. 事件の犯人は太郎だ。

以上のようなパラフレーズ不可能な場合に顕在化するように、CQNP と間接疑問節は厳密には意味的に等価ではない。CQNP が持つ、NP でありながら疑問節にパラフレーズされる (ことが多い) という二面性 (Janus-like nature, Harris 2007: 13) は以上の議論によって説明される。CQNP が名詞句であるという事実は、CQNP がタイプシフトの結果として命題の集合等を表すとするアプローチにとっては説明が求められることになる。しかし、我々にとっては、CQNP は上述の変異が問題となる RF—その ONT の値は名詞句の主要部「犯人」等の意味による—に対応するのだから、NP で表現されることは自然なことである。

4.1.4. 同じ NP の CQ 解釈と非 CQ 解釈の関係と意味の合成性

CQNP が疑問節の表すような意味になる現象に対し、形式意味論では、文全体の意味を合成的に得るため、述語か CQNP かの意味をタイプシフトで調整するアプローチが広く採られている。対照的に認知言語学においては、「積極的に「合成性はそんなにきれいに成り立っていない」と考える」(西村・野矢 2013: 88) ため、合成性を維持するための操作はそもそも措定されない (この差は、理論の根本的な差に由来するものであり、この点から両アプローチの優劣を論じているわけではない)。変異を描写する CQ 述語と、変異を含む RF に対応する CQNP が、関連性を絶えず求める認知主体の心において、述語と項の関係で結びついた結果、疑問節に近い意味が創発するのである。そのプロセスは以下のように記述できる。

形式意味論がタイプシフトで捉えようとしているこのことは、ID等の値の変異が命題相当の意味として機能することで捉えられている。次例 a の CQNP「花子の誕生日」は、太郎の心にある花子 RF の特質 [誕生日 : x] に対応し、x が 7 月 5 日に定まること自体が、b や c の命題的な内容に相当する。しかし、a の存在論的範疇を命題などのコトにシフトさせる必要はない。存在論的範疇のシフトを想定しないことの意義は、前節で述べた通りである。

- (14) 太郎は {a. 花子の誕生日を / b. 花子の誕生日が何日かを / c. 花子の誕生日が 7 月 5 日だと} 知った。

タイプシフトを認めなくとも、CQNP の意味と非 CQNP の意味の異同、及びどちらも項に取れる述語 (responsive predicate) の意味の内実は議論しておくべきだろう。次例 a には、CQ 解釈 (\equiv b) と、非 CQ 解釈 (\equiv c, 犯人は花子とする) がある。

- (15) 太郎は {a. 事件の犯人 / b. 事件の犯人は誰か / c. 花子} が気になっている。

CQ 解釈では、太郎が自分の心にある犯人 RF における ID の自由変項 (同定できていない状態) を定めたいこと、非 CQ 解釈では、犯人 RF (花子だと同定できているため ID a) の内容特徴を豊富にしたいことを表す。このようにパラフレーズしてしまうと、花子について知りたがっている非 CQ 解釈と、犯人について知りたがっている CQ 解釈との間にある「気になっている」の共通性が見えにくくなってしまいが、太郎が自分の心の犯人 RF の情報を得たがっているという点が共通しているため、日本語では同じ表現を使うことができる。このような多義性は、多くの言語の多くの CQ 述語で見られ、これが偶然でないなら、その動機付けが探求されるべきであろう。太郎が自分の心の犯人 RF の情報を得たがっているという意味の共通性がそれにあたる。また、認知言語学では、厳密な合成性を想定する代わりに、「語や構文という文の構成要素の意味によって文全体の意味がある程度決まると同時に、文全体の意味によって文の構成要素の意味が調整されると考え」(西村・野矢 2013: 88) る。これは、タイプシフトのように明示的なものではないため、空手形のように聞こえるかもしれない。潜伏疑問に関する限り、その内実は、本節で述べているようなことであり、RFT の概念によって明確に把握できるようになった。Responsive predicate の項の CQ 解釈と非 CQ 解釈の関係は、ここで述べたように捉えられるのである。

(15) b にあたる CQ 解釈 a に関して、太郎は犯人自体ではなく犯人が誰かが気になっていて、解消すべきズレがあると考えられる人がいるかもしれない。(15) a の b にあたる解釈と c にあたる解釈で違っているのは、RF 中の注目されている部分である。前者では ID の値、後者では CNT が注目されている。両解釈の RF は、ID が x か a かという違いがあるものの、どちらも事件の犯人 RF である点に違いはない。つまり、b の解釈の「気になる」と c の解釈の「気になる」には、目的語に対応する RF の情報を豊富にしたい、という共通した意味が想定できると同時に、

組み合わせる RF のデータの違い (ID が定項か自由変項か) に応じて、どの部分の情報に豊富にしたいかに関して意味が微妙に調整されるということである。組み合わせたものをあえて分解して、それぞれの「気になる」単独の意味をパラフレーズした場合に別義に見えるのは、そのような調整が起こっているからである。勿論、一方の解釈が繰り返された結果、その意味がその場合の項の NP の意味とペアになって知識として定着することもある。以上は、使用基盤モデル (Langacker 2000) からの自然な帰結であり、形式意味論の “question/proposition approaches” (Frana 2017) のように CQNP の意味 (だけ) をシフトさせるとしたり、“property/individual approaches” (Frana 2017) のように CQ 述語の意味 (だけ) をシフトさせると考えたりする必要はない²⁴。

4.2. 潜伏疑問全般にかかわる記述的問題

4.2.1. CQ 述語と CQNP の分布・分類 (問題 VI. 意味的選択制限)

以上の基礎的考察を元に、以下では、潜伏疑問に関する記述的な問題を検討する。まず、CQNP を選択する述語のクラスをどのように特徴付けるべきか (問題 VI, Frana 2020: 344)。CQNP は、間接疑問節 (Indirect Question clause) にパラフレーズ可能であるとひとまず定義したため、どのような述語が IQ を項に取る述語 (IQ 述語) かをまず検討する必要がある。それを出発点にして CQ 述語を規定することになるが、IQ 述語の中で、CQNP も項に取れる述語がどれかは、個別言語ごとに異なる。Caponigro and Heller (2007) によると、マケドニア語には、間接疑問節はあるものの、潜伏疑問の解釈ができる名詞句 (nominals) はない (p.17)。英語では、間接疑問節を項に取れるのに CQNP を項に取れない述語として、*wonder* や *inquire* が知られている (Grimshaw 1979)。しかも、Nathan (2006) によると、*inquire* は以前は問題なく CQNP を目的語に取れたようで、シェイクスピアの例 (*To where you are bound, you must enquire your way*, Cor III.i.54) が挙げられている。そのような語法や通言語的変異は、歴史的偶然の積み重ねの結果としての慣習の産物である面が大きい。本稿は、これらの語法に関する細部には立ち入らず、そのような慣習の成立を可能にする認知的基盤に焦点を当て、CQ 述語を認知的観点から特徴付けるにとどめる。

まず IQ 述語の代表的なものを挙げておく。英語では、Karttunen (1977: 384–385) が、“question-embedding verbs” を分類している ((16))²⁵。各分類項目について例を 1 つ挙げる。日本語については、日本語記述文法研究会 (2008: 40–42) が、「疑

²⁴ CQ 解釈の場合、犯人 RF (ID x) の ID の値に関心があるのではなく、CNT を豊富にしたがっているという解釈になぜならないのかというと、RF の ID が定まらないと、その CNT がいくら豊富でも、RF が位置づけられた世界に接地しないからであろう。「ID が定まって初めて RF は世界と関係を持ち、それへの情報が直接的な関連性を持つようになる」(山泉 2022: 33) ということである。

²⁵ Frana (2017: 2.6) は知覚の報告の動詞 (*see*, *bear* 等) を付け足すことを提案している。

問節が補語になる述語」を分類している ((17), 例の多くと「疑問節の内容に制限のある」もの p.42 は省略)。

- (16) a. verbs of retaining knowledge: *know*; b. verbs of acquiring knowledge: *learn*; c. verbs of communication: *tell*; d. decision verbs: *decide*; e. verbs of conjecture: *guess*; f. opinion verbs: *be certain*; g. inquisitive verbs: *ask*; h. verbs of relevance: *matter*; i. verbs of dependency: *depend on*
- (17) a. 知識の有無に関する述語：知っている，明らかだ；b. 知識の獲得・伝達・消失に関する述語：覚える，伝える，尋ねる；c. 推測・判断・決定に関する述語：推測する，決める；d. 命題の重要性・関連性に関する述語：重要だ，依る

両者は分類の粒度に違いはあっても，大きな差はなく，大まかな対応関係が見られる。少なくとも日英語では，間接疑問節を項に取れるかどうかは，述語の意味によると考えられる。では，どのような意味の IQ 述語が個別言語の慣習が許せば CQNP をも項に取れるのか。CQNP が定形の間接疑問節にパラフレーズできるということは，心身二元論に基づく実効一認識のスケール (Langacker 2010: 196) において，後者の側にある述語であるのは確かである。その中でも問題となっている心における RF の ID 等の値の変異を問題にする述語ということになる。変異をプロファイルしないものは CQ 述語になりにくいのである (4.1.3)。そして，個々の発話において CQNP の項として現れる可能性があるのは，問題の心において変異が問題となっている値を含む RF (またはその部分構造) に対応するところということになる。

CQ 述語は，ID 等の (プロファイルされた) 変異の仕方により，以下のように分類できる。「→」の左は，CQNP に対応する RF において変異する部分の値に関する，発話前における話し手による聞き手の心の見積もり (従来 of the way 前提に含まれる) を表す。「→」の右は，CQNP に対応する RF において変異する部分の値に関して，話し手が発話によって聞き手の心に行おうとしている操作の結果として意図された状態 (従来 of the way 前提に含まれる) を表す。なお，「変異」という概念には，「→」の左と右で値が違うということだけでなく，左右それぞれ単独で定まっていなくても含まれる。

- (18) a. **決定型** ($x \rightarrow a$) : が決まる，を予想する²⁶，がわかる，を知る，を思い出す等
- b. **選択型** ($a, b, \dots \rightarrow a$) : を選ぶ，をしぼる，を迷う等
- c. **変更型** ($b \rightarrow a$)²⁷ : が変わる，を变える，が違ってくる等

²⁶ 「予想する」「推測する」などは，変異が問題になっている部分が，聞き手にとっての現実以外の位置付け (@) において定まると考えられる。

²⁷ このタイプは基本的に特質の値か関係性のリンク先が変異し，ID が変異することは，ドッ

- d. **案出型** (無 → a)²⁸: [新生児の名前, 論文のタイトル等] を考える等
- e. **不明型** (x/a, b, ... → a)²⁹: が不明だ, がわからない等
- f. **忘却型** (a → x): を忘れる, を白紙に戻す等
- g. **依存型** (x → a ⇒ y → b): ~が…に依存する, ~が…次第だ等

このようにまとめると, aの決定型を基本に, 他はそのバリエーションとしてひとまず整理できる。つまり, b, c, dは定項になる前の状態が異なり, eは決定されない点が異なる。fはaと逆方向の変化であり, gは2つの決定が連動するものである。これらの中には, 疑問詞が表すような変項では捉えきれないものもあるが, 潜伏疑問文の分析は, これら全てを視野に入れたものである必要があり, 本稿の変異という概念はそれを捉えようとしたものである(そのため抽象度の高い概念になっている)。

分類について付言しておく。○○型という名前は, 便宜的なもので, 必ずしも本質を捉えたものではない。また, 変異の仕方は, CQ述語ごとに多様なニュアンスがあり, 「x → a」などの単純な記述で捉えきれものではない。さらに, 多くの述語は多義的で, CQ述語でない意味も持っている(例「知る」)。CQ述語としても複数の分類項目にまたがった多義性を示すものもあるかもしれない。「わかる・わからなくなる・わからない」が示すように, 述語のアスペクトや極性によっても分類項目が変わる。最後に, CQNPに「の有無」と足すと, IDの変異の仕方が null値を含んだものになる³⁰。

2節において, 間接疑問節に機械的にパラフレーズできない事例にも, CQNPと認められるものがあることを予告した。実は, dのタイプは, 間接疑問節にパラフレーズできない。

- (19) 花子は産まれてくる子の名前(/ # 何が産まれて来る子の名前か) を考えた。
- (20) 太郎は会議をサボる理由(/ # 何が会議をサボる理由か) を考えた。

また, 以下の下線部は, 選択型だが, 間接疑問節のパラフレーズは不自然であり,

ト事物(ジャッケンドフ 2012/2019: 31章。例 ONT 人の ID 心・体)の場合を除いて無い。一般に, RF 全体の ID の変異は, 特質の値や関係性のリンク先の変異と違って, 自由変項が定項に定まることやその逆はあっても, ある定項 a から別の定項 b になることはない(変わってしまったら同一性がなくなってしまう)。

²⁸ このタイプは, 査読者及び西山佑司氏の示唆により, 設けることにした。おそらく, CQNP は値がなかった特質を表すものに限られる。

²⁹ (8) a の「知らない」の場合には, 変異が問題になっている部分が, 太郎自身の心では定項か自由変項か既に決定しており, そのどちらであるかが談話上特に問題となっている。話し手は, 太郎の心についての聞き手の知識状態は決定していないという想定の下, その部分を自由変項に決定することを意図しているのである。このことを, x or a → x と表した。不明型の「x/a, b, ... → a」という表記は, 候補 (a, b, ...) が出揃っている状況で, 決定に至らない場合も含めたものであり, (8) a の記述と矛盾するわけではない。

³⁰ 「有無」を足したものの自然言語によるパラフレーズは, 極性疑問節になる。

(i) 太郎の結婚相手「の有無≒がいるかないか」を予想する。

あえて解釈しても意味が変わってしまう (CQNP の場合は、既に候補地の集合があり、その集合を小さくしていったということだが、間接疑問節の場合は、候補地になっていない場所の集合から候補地の集合を作ったという意味になるだろう)。ここまでの議論を踏まえれば、このような例は、間接疑問節へのパラフレーズができなくとも、値の変異が問題になっているという概念的規定に当てはまっているため、パラフレーズという仮の足場を外して CQNP と認めることに問題はないだろう。

(21) 国際オリンピック委員会は候補地 (≠どこが候補地か) を絞った。

江口 (2002: 76) で分析されている次のような例も、「太郎」が誰かを問う指定の間接疑問節にパラフレーズできない。しかしこの場合も、太郎 RF にある、調子・体調・機嫌など、何らかの特質の値の変異が問題になっているとは分析できる³¹。

(22) 明日の試合の勝敗は太郎 (≠太郎が誰か) 次第だ。

ただし、この「太郎」は、値の変異が問題である特質を直接表さない点が、(6) b「自分の身長」などとは異なる。従来潜伏疑問文と呼ばれてきた例との共通性と相違点が捉えられた今や、このような例をも潜伏疑問文としてもよいかもしれないが、混乱を招かないように、変異が問題になっているものを直接表していないものは潜伏疑問文亜種と呼ぶことにしよう。潜伏疑問文亜種は依存型以外の述語では作り難いようだが、2つの変異する特質 - 値の依存関係という依存型の文の意味的枠組みが、潜伏疑問文亜種を可能にしているのかもしれない。

本分析にしたがうと、潜伏疑問文にならない場合の理解も深まる。例えば、*believe*・「信じる」は、ID 等の値の変異を問題にせず、問題の心における (変項を含まない) 信念の有無を問題とするため、間接疑問節も CQNP も項に取れない。また、ID 等の値の変異が問題になるということは心的な事象であるから、心的ではない述語は CQ 述語にならない。次のデータはこのことを裏付ける。「言う」は非常に多義的だが、言語で伝達するという心に関わる意味と、「口に出す」にあたる物理的動作の意味を問題にしよう。次例 a は、下線部を CQNP として解釈する場合、b の意味、つまり「花子の誕生日は7月5日だ」と伝えたというような意味にはなるが、c の意味にはならない。伝達相手の心における花子 RF の特質 [誕生日: □] の値の変異が問題になるのは前者の意味の場合のみだからである。

- (23) a. 太郎は花子の誕生日 (≠花子の誕生日は何月何日か) を言った。
 b. ≡太郎は「花子の誕生日は7月5日だよ」と口頭で伝えた。
 c. ≠太郎は「7月5日……」と (独りで) 口に出した。

本稿の CQ 述語の特徴付けに対して予想される反論に応答しておく。上の述語のリストの中には、「(オリンピックの開催地が) 決まる」等、RF のある心が直接関

³¹ うなぎ文「僕はうなぎだ」の「僕」が僕 RF の関係性 - 注文料理も表すのと類比的である。

わらないように見える述語があり、これらにはここでの特徴付けが当てはまらないという反論である (cf. 西山 2003: 84)。しかしこの場合も、RFT の認知的視座 (ジャッケンドフ 2012/2019, 山泉 2020b) からは、通念という仮想的な心において未来のオリンピック大会 RF のリンク先《開催地: □》の値が定項に変化するということが意味されていると考えられるため、反例にはならない。では、主語名詞句も述語名詞句も CQNP である次例はどうだろうか³²。

(24) 明日の試合の勝敗は先発投手の調子次第だ。

この例は独立変数と従属変数の間の因果関係を表しているのであって、RF のある心は関係ないという反論が考えられるものの、反例にはならない。この例では、値の変異が問題である RF が 2 つあり、述語名詞句の表す値 (先発投手 RF の特質 [調子: □]) の変異そのものが心で問題になっているのではなく、その変異にともなう主語名詞句の表す値 (試合 RF の特質 [勝敗: □]) の変異が、話し手・聞き手を含む複数の心において高い共有度で、つまり間主観的に問題になっている。これらも認知的視座からは、結局のところ心の問題であり、世界に関する知識に存する値の変異が問題になっているのである。

以下のデータが分析を裏付ける。「A は B 次第だ」構文は、B の表す値が確定していると用いにくい ((25))。発話者が占い師で、まだ誕生日を知らないという状況ならば、幾分容認度が上がるだろう。占い師の心では発話者 RF の特質 (誕生日) の値が未定で、変異の余地があるからだ。また、この構文で述べられていることが過去のことで、心において既に値が定まっていたら、構文の具現化は可能であるものの、定まっていない場合よりも不自然になろう ((26))。値の変異の余地がないことは、CQNP の特徴に反するからである。

(25) ?? 明日の試合の勝敗はあなたの誕生日次第だ。

(26) (試合を見た人同士で) ? 昨日の試合の勝敗は先発投手の調子次第だった。

4.2.2. CQNP を照応する代名詞 (性質 III)

CQNP は、性の区別のある代名詞による照応が通言語的にできず、中性の代名詞と照応関係を結ばなければならないということが知られている (性質 III, Harris 2007: 14。以下の英語の例は Romero 2004: 165)。(27) が示すように、最優秀女優賞の受賞者は誰であっても女性であるのに、*her* で照応できない。(28) のように日本語でも同様である。

(27) John guessed the winner of the Oscar for best actress before I guessed {it/*her}.

(28) マリは、ついに「自分の好きなひと」/「自分の恋人」を白状したが、{それ

³² ただし、主語 NP の潜伏疑問は、選択疑問 (あるいは極性疑問) である (注 4 参照)。

* 彼_i はタカシくんではなかった。(西垣内 2020: 49)

西垣内 (2020: 49) は、この例について、「ひと」を指す「彼」よりも事物を指す「それ」の方が適切」とし、このことを「潜伏疑問」の主要部が発音される形式の主要部とは異なるものであることを示すひとつの証拠 (p. 49) と考える。しかし、本稿の立場では、この「それ」は、ONT の値が何らかのオト的な値の RF に対応するのではなく、人の RF に対応しており、それでも「彼」が使えないのは ID の種類のためである。RF の ID の種類 (定項, 自由変項, 束縛変項, null 値) の区別は、概念構造においてなされるものであるが、言語形式に反映され得る (ONT の区別も同様) ³³。She や he は、「彼」「彼女」やア・コ系列 (ソ系列は異なる) の代名詞と同様、基本的に ID が定項の RF に対応し、CQNP のように値の変異が問題である RF には対応しない。そのため上例では用いられないと RFT では一般化できる。固有名詞も ID の定まった RF に対応するのが普通だから、CQNP 主要部になりにくい (4.3)。

なお、西垣内 (2020) は、この例の「それ」は「その人」にすると容認性が上がるといふ査読者の指摘に対して、「先行する節の述語が「白状する」という叙実動詞 (factive) ³⁴ であり、これによって談話指示対象が確立されるために起こった現象と考えられる」(p. 49) と反論している。しかし、次例のように、叙実動詞でない場合でも「その人」や「そいつ」が使えるため、この反論は無効であろう。やはり「それ」の存在論的範疇は人だと考えられる。

(29) マリは、{ユリの好きなひと_i / ユリの恋人_i} を推測したが、
 {それ_i / その人_i / そいつ_i / * 彼_i} はタカシくんではなかった。

4.2.3. CQ 述語は本当に個体を項に取る外延的動詞と等位接続しないのか (性質 IV)

(30) が示すように、CQ 述語同士の等位接続は可能 (b) だが、CQ 述語が個体を項に取る非 CQ 述語と項を共有して等位接続することはできない (a) とされている (Harris 2007: 15。例文の出典も同じ)。

- (30) a. # John predicted and later kissed the winner of the contest.
 b. Cf. John predicted and later determined the winner of the contest.

このことは、共有されている項が、CQ 述語の項としては ID 等の値の変異が問題となっている RF に対応するのに対して、非 CQ 述語の項に対応するのは、値に

³³ 対応する RF の ID の種類の区別があらゆる名詞句の音韻・統語に常に反映されなければならないわけではないから、ID の種類によってたとえば隠れた統語構造が異なる必要はない。

³⁴ 「白状する」が叙実動詞であることは、続けて補文の内容を否定している次の例が示唆するように疑わしいが、ここでは立ち入らない。

(i) 私は、太郎が犯人だと |白状した / ?? 知っていた| が、そうではなかった。

変異がない項であるため、RF にズレがあるからだと理解できる。しかし、確かに上のようなズレがなければ、等位接続は容易であるものの、ズレがあっても、次例 c, d は、a, e よりも容認度が高い。

- (30) c. (?) John decided and later kissed the winner of the contest.
 d. (?) John announced and later kissed the winner of the contest.
 e. # John predicted and later killed the winner of the contest.

この差は、認知言語学で盛んに議論されているフレーム—「認知領域、理想認知モデル、スクリプト (script)、一つの意味の規定に関わる複数の認知領域のまとまり (matrix) などを含む広義の用語」(西村 2002: 293) —や (広義の) メトニミー—「ある言語表現の複数の用法が単一の共有フレームを喚起しつつ、そのフレーム内の互いに異なる局面ないし段階を焦点化する現象」(p.299) —の概念によって説明することができる。田中 (2023: 7.3.6) によると、メトニミーの基盤として必要なフレームは、この規定より限定されたもので、「連合によって構成されたフレーム」(p.203) である。例えば、「自転車 (→自転車のペダル) をこいだ」(西村 2002: 287) というメトニミーの背後には、「〈ペダルを足で動かすことによって自転車を前進させる〉」(p.297) というフレームが想定されており、このフレームでは「自転車のペダルに働きかけることは自転車全体に働きかけ前進させることでもあり、強固な連合が成立していると考えられる」(田中 2023: 203)。(30) c, d では、*the winner of the contest* の *decided/announced* の項 (CQNP) としての意味と、その *kissed* の項 (非 CQNP) としての意味がメトニミーの関係にある。1つの RF 内での焦点の移動が起こっており、これはすなわち1つの心的表象という知識構造の中でどの部分を焦点化するかの違いであるからである。このメトニミーが成立するには、等位接続された各要素の意味が連合してフレームを構成する必要があることになる³⁵。これらの例では、容認度の低い a, e とは対照的に、〈勝利の女神が勝者を決めてその人にキスをする〉という連合フレームが喚起され、容認度が高まるのである³⁶。

CQ 述語と非 CQ 述語の等位接続の可否については、もしこれが文法的制約である場合、共有項に対応する RF における値の変異の有無の違いで説明できるが、百科事典的知識に依存するものである場合には、フレームの観点から説明すべきであろう。

³⁵ 1つの NP の CQ 解釈と非 CQ 解釈 (4.1.4) においても、両 NP の RF 同士はメトニミーの関係にあるが、両 NP は同一文中では実現せず、連合フレーム条件はあてはまらない。

³⁶ 馴染みのフレームの事例として解釈できる場合に容認度が高くなる現象は、潜伏疑問だけでなく、メトニミー的多義についても見られる。(i) の「大江健三郎」は「読んで」の項としては、作者で作品を表すメトニミーだが、「殺した」の項としては、単に人を表す。このようなズレがあるこの発話の容認度は確かに低いものの、2つの行為—読んだと殺した—の関係を説明する「むかついて」を (ii) のように挿入すると、容認度が高まる。

(i) ?? 太郎は大江健三郎を読んで殺した。

(ii) 太郎は大江健三郎を読んでむかついて殺した。

4.2.4. 命題態度の報告において含意関係が成り立たないこと（性質 II）

Heim (1979: 54) が指摘するように、次例 a には、潜伏疑問の読み（ジョンはイタリアの首都がどの街であるかを知っている）と、そうではない読み（ジョンはイタリアの首都（すなわちローマ）を見知っている）がある。後者の読みの場合には、a と b から c（ジョンはイタリア最大の街（ローマ）を見知っている）が含意される。一方、潜伏疑問の読みの場合は、a と b から c（ジョンはイタリア最大の街がどの街かを知っている）は含意されない。

- (31) a. John knows the capital of Italy.
 b. The capital of Italy is the largest town in Italy.
 c. ∴ John knows the largest town in Italy.

RFT では含意関係は一般に次のように捉えられる。まず、命題の真偽は、命題の表現から言語使用者が頭に構築した世界（の部分）の在り方が、その言語使用者の頭の中に既にある世界（の部分）の在り方と整合しているかどうかによる（詳しくは、ジャッケンドフ 2012/2019: 34 章, 山泉 2020b: 1.3.2）。ある命題 a が真と認められる場合に、別の命題 b も必ず頭の中の世界と整合して真と認められる場合に、両命題の心的表象の間に a が b を含意するという関係が成り立つ。

さて、名詞句に対応する RF の位置付けは、「（話し手が想定する）聞き手（の心にとっての現実世界の実態）」がデフォルトの値である。非 CQ 読みの a と c は、John の心において何らかの都市の RF が定項であることを述べているが、RF に言及する際に用いている内容特徴（〈a is the capital of Italy〉や〈a is the largest town in Italy〉）が John の心にある必要はない。一般に、RF に言及する際、ID 等の変異が問題になっていなければ、その RF が位置付けられる心に入っていない内容特徴を言語化して用いてもよい。b は、そもそも CQ 読み／非 CQ 読みの曖昧性はなく、指定文の RF の統合（(5) a）の結果、1つの都市 RF に、上の2つの内容特徴があることになる。この文に *John knows* 等は現れていないため、John の心においてその2つの内容特徴が同じ RF に入っている必要はない。つまり a と c は、John の心において ID が定項である都市 RF に、異なる方法—何らかの位置付けの1つの RF がある2つの内容特徴—で言及しているにすぎず、基本的に同じことを述べているだけであるため、非 CQ 読みでは含意関係が成り立つ。

一方、CQ 読みの場合、John の心におけるその RF の ID の変異が問題となり、CQNP の表現 *the capital of Italy* と *the largest town in Italy* が表す内容特徴は John の心の CQNP に対応する RF に入っていなければならない³⁷。この場合も b は非 CQ 読みの場合と同様、何らかの位置付けにおいて1つの都市 RF に2つの内容特徴がど

³⁷ 4.3 で論じるように、CQNP は、問題になっている心でフレーム・役割モデルで対象をカテゴリー化しており、その役割に対応する RF の ID 等の変異が問題になっているため、そのフレームに関わる内容特徴（例 x が洋梨を盗んだ）は、問題の心に入っていなければならないのである。

ちらも入っていることを述べているにすぎない。つまり、aとcはJohnの異なる心的状態を述べており、しかもbは先程と同様、Johnがそう思っていると解釈する必要はないから、aとbの意味する事態は結びつかず、含意関係が成り立たないのである³⁸。

次節では、先行研究において議論されてきた、CQNPの主要部名詞の種類（関係名詞か否か等）は文法によって統制されているのか（問題VII）と、名詞修飾によるCQ解釈への影響（問題VIII）をカテゴリー化の様式（氏家・田中2024）の観点から論じる。

4.3. CQNPとカテゴリー化の2つのモデル（問題VII, 問題VIII）

全ての名詞句が等しくCQNPとして振る舞うわけではない。たとえば、固有名詞・種別名詞（sortal noun）・値を表す名詞が項になる場合、特別な文脈を設定しなければ潜伏疑問文を形成できないことが知られている（Frana 2020: 238f.）。(32)から明らかかなように、固有名詞によって指示される対象を知っているとは、その対象がどれかを知っているということではなく（つまりCQの解釈ではなく）、対象への見知り（見知り）を有しているということである。この場合であれば、太郎が次郎という人に関する知識を有していることが主張されている。

このことをRFTの立場から述べ直すならば、固有名詞の指示対象を知っているとは、対応する（ID定項の）RFを、自身の心に位置づけて作成できるということである。

(32) # 太郎は次郎を知っている。「太郎は次郎を見知っている」と解釈される

(33) aのような種別名詞の場合も、[+token]の場合と[-token]の場合を区別しなければならないものの、同様に、CQの解釈は不可能である³⁹。(33)bのように、何らかの特質の値の場合にはリンク先の値とは異なり、独立したRFに対応しないため容認されない（4.1.1参照）。

(33) a.# 太郎は本を知っている。 b.* 太郎は170 cmを知っている。

CQNPの主要部としてしばしば挙げられるのは、いわゆる関数名詞（functional noun: Löbner 1981, Caponigro and Heller 2007, Percus 2014, 西垣内 2020）および、関係名詞（relational noun: Nathan 2006, Barker 2016）である。(34)に関数名詞の例を、

³⁸ RFTにおける、名詞句の置き換え可能性に関する議論は山泉（2021: 118–120）も参照。

³⁹ 「知っている」とは、[+token]の場合には、個別の対象であるID定項のRFが作れるということ、[-token]の場合には、種別概念であるID定項のRFが作れるということである。後者の場合には、IDの区別を論じることが難しいように思われるかもしれない。一般に、あるタイプのトークン同士は、domain of instantiation（Langacker 1991, 例: 時空間上の位置）によって区別される。タイプの場合には、このような区別の基盤が存在しない。当のタイプはそれ自身しか存在しないということである。そのため本稿では、あるタイプ（[-token]の対象）を知っているとは、すなわちID定項のRFを有していることであると考えられる。

(35) に関係名詞の例を挙げる。

(34) 太郎は {ドイツの首都 / 花子の年齢 / 太郎の父親} を知っている。

(35) 太郎は {ドイツ主要都市 / 花子の電話番号 / 太郎の子供} を知っている。

関数名詞は項が指定されれば値が単一の ID 等に定まる名詞句であり、関係名詞は項が指定されれば値となる ID 等の集合が定まる名詞句である。このことから、関数名詞は関係名詞の一種として位置づけられると考えられる。関数名詞以外の関係名詞も CQNP となることから、本稿では両者を特に区別せずに関係名詞として扱う。

さらに、種別名詞からも CQNP を作れることが知られている (Kalpak 2020)。(36) における「本」は種別名詞であるが、「次郎が昨日買った」のような制限的關係節によって修飾することで、「本というものを知っている」という意味 (すなわち [-token] の本 RF を作成できるという意味) ではなく、当の本がどれかを知っている (ID が定項 a に定まる) という意味になる。単独の種別名詞であっても、たとえば、複数のシルエットの中からどれが靴であるかを見抜く課題においては、(37) は自然な CQ となる (cf. Frana 2006: 33)。

(36) 太郎は {次郎が買った / # ϕ } 本を知っている。

(37) 太郎は靴が分かった。

以下では、カテゴリー化の様式に着目することで、ここまで見てきた名詞の種類による CQ 解釈の難易を統一的に説明できることを示す。氏家・田中 (2024) は、名詞が表す対象をカテゴリー化する際のモデルとして、「類・事例モデル」と「フレーム・役割モデル」の2つを挙げている。簡単に言えば、前者は対象が内在的に有する性質に着目したカテゴリー化であり、後者は対象がフレームとの関係で外在的に有する性質に着目したカテゴリー化である⁴⁰。

種別名詞を用いた場合には通常、類・事例モデルによるカテゴリー化が行われる。ある対象が〈本〉であることや、〈犬〉であることを見定めるためには、当の対象のみを観察すれば良い。それに対し、関係名詞を用いた場合には通常、フレーム・役割モデルによるカテゴリー化が行われる。ある対象が〈首都〉であることや、〈父親〉であることは、当の対象を独立に観察するだけでは (ほとんど) 分からず、フレームを特定し、そこでの役割によって見定める必要がある。

CQNP として機能する名詞の典型例である関係名詞は明らかに、フレーム・役割モデルを用いたカテゴリー化を促すものである。種別名詞がここまで見てきたような制限的關係節によって修飾される場合や、クイズのような文脈で用いられる場合にも同様に、フレーム・役割モデルが重要な役割を果たしていると考えられる。

⁴⁰ もちろん両者は完全に独立しているわけではない。以下の議論はどちらのモデルがより重要な役割を果たしているかに着目したものである。

(36)の「本」や(37)の「靴」は種別名詞であり、通常は類・事例モデルによるカテゴリー化を要求する。しかし、これらの事例では、次郎による本の購入という出来事において本の役割を果たしている対象、様々なシルエットのうち靴の(対応物の)役割を果たしている対象として、フレーム・役割モデルによっても捉えられているのである⁴¹。

4.1.1で述べたように、CQNPに対応するRFは、談話において問題となっている心において、ID等の値がどう変異するかがCQ述語によって表されるという特徴を持つ。フレーム・役割モデルを用いた場合には、外在的性質によるカテゴリー化が行われるため、対象それ自体が同定されていなくとも、フレームにおける役割を手がかりとして、RFを作成することができる。そのため、ID等の変異を問題とするCQNPとして振る舞うことができるのである。たとえば(38)は、太郎の心に位置づけられた、(典型的にはID定項の)事故RFのCNTに《関係性:リンク先》として《原因:x》という内容が含まれていることを表している。ある事故の原因は、原理的にはどのような出来事であっても良い。そのような段階でそれを(原因という)対象としてカテゴリー化し、IDの変異を問うるのは、事故RFがフレームを喚起し、そこにおける役割の一つとして位置づけることができるためである。

(38) 太郎はこの事故の原因を知らない。

一方で、類・事例モデルによるカテゴリー化の場合、対象の内在的性質によるカテゴリー化が行われる。これはつまり、対象が定まって初めてカテゴリー化が可能になるということである。名詞句がCQNPとして振る舞うためには、ID等が変異する可能性が読み込まれなければならない。しかし、その段階の対象には類・事例モデルによるカテゴリー化は適用不可能である。このことは、4.1.1で述べた、「自由変項を定めたくなる働き」によっても確かめることができる。「この事故の原因」という表現からは、何が原因なのか分からない段階でも、自然とID自由変項の(つまり、どの対象なのか具体的には分かっている状態の)RFが喚起されるが、「本」や「犬」という表現は、〈太郎が買った〉などのフレームなしにはID自由変項のRFを喚起することは極めて困難である。要するにヒトは普通、フレームへの参照なしにID自由変項の本や犬を想起しておいて、それがどの本・犬なのかと考えることはしないということである。たとえば、「太郎が飼っている犬は何だろう」はまともな問いであるが、「犬は何だろう」は(複数の対象の中から犬を選ぶというようなフレームが設定されているのでもなければ)奇妙な問いであろう。類・事例モデルの典型例である種別名詞が他の要因による支えなしにはCQNPにならない

⁴¹ Frana (2020: 329)は、関係名詞であってもCQNPとして用いるのが難しい例として、*nose* (「鼻」)を挙げている。本稿の議論を踏まえればこれは、〈鼻〉のカテゴリー化にはフレーム・役割モデルも関わっているものの、類・事例モデルの働きの方がより中心的であるためだと説明できる。

のはこのことの反映なのである。先行研究において、関係名詞が CQNP の典型事例と見なされてきたのは、この名詞類がフレーム・役割モデルによるカテゴリ化と慣習的に結びついているためだと考えられる。どのような名詞句が CQNP として振る舞うかは、突き詰めればカテゴリ化様式によって決まる事柄だと言えよう。

5. 結論

認知言語学的アプローチ、特に指示参照ファイル理論の基本想定とそれに基づく記述装置—埋め込まれた心にある RF や変異の可能な ID 等の素性—によって、新たな角度から潜伏疑問の本質に迫ることができた。形式意味論 (Romero 2005 等) や生成文法 (西垣内 2020) で議論されている、CQNP と (倒置) 指定文の被指定名詞句との関係は十分に扱えなかったが、共通性と相違点について一定の見通しを示すことはできたものと考えられる。(倒置) 指定文の被指定名詞句の意味的性質について、生成文法家の間で論争が続いているが (西垣内 2016 他や西山・西川 2018 等)、これも主要部名詞の語彙の意味から規定しようとするのではなく、カテゴリ化様式の違いによって捉えるべきである。専ら類・事例モデルのカテゴリ化だけによって RF の自由変項が定まることはない (4.3) のであるから、指定文の指定が起こるには、その名詞が何であれ、フレーム・役割モデルによるカテゴリ化が関与する必要があるということになる。

潜伏疑問文に関する言語間の差や個別言語の語法研究は今後の課題である。従来の CQNP の定義に従うと、間接疑問節がない言語には CQNP もないことになる。しかし、本稿の CQNP の規定は間接疑問節へのパラフレーズに依存したものではないため、そのような言語でも CQNP が存在する可能性があることになる。今後の研究が俟たれる。

参考文献

- Baker, Carl Leroy (1968) *Indirect questions in English*. Doctoral dissertation, University of Illinois.
- Barker, Chris (2016) Why relational nominals make good concealed questions. *Lingua* 182: 12–29.
- Caponigro, Ivano and Daphna Heller (2007) The non-concealed nature of free relatives. In: Chris Barker and Pauline Jacobson (eds.), *Direct compositionality*, 237–263. Oxford: Oxford University Press.
- Declerck, Renaat (1988) *Studies on copular sentences, clefts and pseudo-clefts*. Dordrecht: Foris.
- 江口正 (2002) 「A は B 次第だ」の解釈について」『福岡大学日本語日本文学』12: 72–82.
- Frana, Ilaria (2006) The *de re* analysis of concealed questions. In: Masayuki Gibson and Jonathan Howell (eds.), *Proceedings of Semantics and Linguistic Theory 16*, 17–34.
- Frana, Ilaria (2017) *Concealed questions*. Oxford: Oxford University Press.
- Frana, Ilaria (2020) Concealed questions. In: Lisa Matthewson, Cecile Meier, Hotze Rullmann, and Thomas E. Zimmermann (eds.), *Companion to semantics*, Vol. 1, 325–348. New York: Blackwell.
- Grimshaw, Jane (1979) Complement selection and the lexicon. *Linguistic Inquiry* 10: 279–326.
- Harris, Jesse Aron (2007) *Revealing concealment*. Master's thesis, Universiteit van Amsterdam.
- Heim, Irene (1979) Concealed questions. In: Rainer Bäuerle, Urs Egli, and Arnim von Stechow (eds.), *Semantics from different points of view*, 51–60. Berlin: Springer.
- 井元秀剛 (2006) 「コンピュータをめぐる名詞句の意味論と語用論」高岡幸一教授退職記念論文

- 集刊行会 (編) 『シェンボシオン』 13–22. 東京: 朝日出版社.
- ジャッケンドフ, レイ (大堀壽夫他訳) (2012/2019) 『思考と意味の取扱いガイド』 東京: 岩波書店.
- Kalpak, Hana (2020) The semantics and pragmatics of nouns in concealed questions. *Semantics & Pragmatics* 13: 1–27 (Article 7).
- Karttunen, Lauri (1977) Syntax and semantics of questions. *Linguistics and Philosophy* 1: 3–44.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of cognitive grammar*, vol. 2, *Descriptive application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2000) A dynamic usage-based model. In: Michael Barlow and Suzanne Kemmer (eds.), *Usage-based models of language*, 1–64. Stanford: CSLI Publications.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive grammar*. New York: Oxford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2010) Control and the mind/body duality: Knowing vs. effecting. In: Elzbieta Tabakowska, Michal Choinski, and Lukasz Wiraszka (eds.), *Cognitive linguistics in action*, 165–208. Berlin: De Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2015) Construal. In: Ewa Dąbrowska and Dagmar Divjak (eds.), *Handbook of cognitive linguistics*, 120–143. Berlin: De Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2016) Toward an integrated view of structure, processing, and discourse. Grzegorz Drożdż (ed.), *Studies in lexicogrammar: Theory and applications*, 23–53. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Löbner, Sebastian (1981) Intensional verbs and functional concepts. *Linguistic Inquiry* 12: 471–477.
- Nathan, L. Edward (2006) *On the interpretation of concealed questions*. Doctoral dissertation, MIT.
- 日本語記述文法研究会 (2008) 『現代日本語文法 6 第 11 部 複文』 東京: くろしお出版.
- 西垣内泰介 (2020) 「潜伏疑問」の構造と派生』『言語研究』 157: 37–69.
- 西村義樹 (2002) 「換喩と文法現象」西村義樹 (編) 『認知言語学 I』: 285–311. 東京: 東京大学出版会.
- 西村義樹・野矢茂樹 (2013) 『言語学の教室』 東京: 中央公論新社.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論』 東京: ひつじ書房.
- 西山佑司編著 (2013) 『名詞句の世界』 東京: ひつじ書房.
- Percus, Orin (2014) What concealed questions might conceal. In: Luka Crnic and Uli Sauerland (eds.), *The art and craft of semantics*, vol. 2, pp. 23–45.
- Recanati, François (2016) *Mental files in flux*. Oxford: Oxford University Press.
- Romero, Maribel (2004) Intensional noun phrases with *know* and *be*. *Catalan Journal of Linguistics* 3: 147–178.
- Romero, Maribel (2005) Concealed questions and specificational subjects. *Linguistics and Philosophy* 28: 687–737.
- スコット = フィリップス, トム. (畔上耕介他訳) (2015/2021) 『なぜヒトだけが言葉を話せるのか』 東京: 東京大学出版会.
- スペルベル, D.・ウィルソン, D. (内田聖二他訳) (1995/1999) 『関連性理論』 東京: 研究社.
- 田中太一 (2023) 『文法の哲学的基盤』 博士論文. 東京大学.
- 氏家啓吾・田中太一 (2024) 「名詞の (非) 飽和性とカテゴリー化—多義の事例から—」『日本語文法』 24: 20–36.
- 山泉実 (2020a) 「指示参照ファイル理論序説」『日本語・日本文化研究』 30: 1–28.
- 山泉実 (2020b) 「認知的視座からの意味論と形而上学」『日本語・日本文化研究』 30: 29–52.
- 山泉実 (2021) 「潜伏疑問名詞句再考」『言語文化研究』 47: 101–122.
- 山泉実 (2022) 「潜伏命題名詞句再考」『基礎言語学研究』 1: 1–37.
- 山泉実 (2023a) 「名詞句の自由拡充再考」『科学哲学』 55: 89–110.
- 山泉実 (2023b) 「日本語の等位複合体 (co-compound) とそれを主要部とする名詞句の認知意味論・形態論」『東京大学言語学論集』 44: e42–e85.
- 横路佳幸 (2021) 『同一性と個体』 東京: 慶応義塾大学出版会.

執筆者連絡先：

山泉 実

e-mail: yamaizumi.minoru[at]gmail.com

田中太一

e-mail: tanaka[at]go.tuat.ac.jp

[受領日 2023年8月29日

最終原稿受理日 2025年8月7日]

Abstract

A Cognitive Linguistic Study of Concealed Questions: From the Viewpoint of Reference File Theory

MINORU YAMAIZUMI

The University of Osaka

TAICHI TANAKA

Tokyo University of Agriculture and Technology

This paper presents a principled analysis of *Concealed Questions* (CQs) using the *Reference File Theory* (RFT), a cognitive linguistic framework for understanding the meaning of noun phrases. CQs are expressions in which a noun phrase that functions as an argument of a predicate semantically corresponds to an embedded *wh*-question, as in “Taro knows the cause of the accident”. Analyses based on generative syntax and formal semantics, which sharply separate semantics and pragmatics and treat grammar as a purely formal system, have left unresolved three major issues: (A) the selectional restrictions on CQ predicates, (B) the nature of the noun phrases that can function as CQs, and (C) the relationship between noun phrase modification and CQ interpretation. By reinterpreting CQs as expressions whose associated varying identity (ID) within a subject’s mental representation is described by their governing predicates, this study offers cognitive linguistic answers to the above issues: (A) by enumerating seven types of CQ predicates that differ from each other in the way they describe the varying value of ID; (B) by characterizing CQ noun phrases in terms of the frame-role model proposed by Ujiie and Tanaka (2024); and (C) by clarifying how noun phrase modification tends to activate the frame-role model.

Key words: Cognitive Linguistics, Reference File Theory, Concealed Questions, Categorization